

## 2.3 適切な避難行動に係る現状整理と課題の抽出

—過去の災害では—

- 新潟・福島豪雨(2004年7月)・・・この豪雨で16の方が亡くなったが、その内13人が70歳以上の高齢者で、その中には寝たきりや独り暮らしの方もいた。死因は約半数が溺死で、水かさが急激に上昇するなか、自宅2階に逃げようとしたり、外に逃げようとしたところを濁流に呑み込まれている。三条市等では、豊かな地域コミュニティが形成されていたものの、避難するための時間的余裕がなかったため十分に機能せず、多くの高齢者が亡くなったと考えられている。また、中之島町では保育園が水の中に孤立しヘリコプターによる救助が行われた。また三条市、見附市、中之島町など5市町村の小学校6校、中学校4校も水に囲まれて孤立し、児童・生徒ら1400余人が帰宅できなくなり、校舎内で一夜を過ごした。【災害列島2005：国土交通省河川局】
- 東海豪雨(2000年9月)・・・避難勧告・指示を告げられたことを知らずにいた住民も多かった。特に高齢者だけの世帯では耳の遠い人も多く、浸水のスピードが速かったことと相まって、家に取り残されるケースが多かった。また、独り暮らしの高齢者の中には、迫り来る濁流を前に逃げるに逃げられず、水に浸かった家の中に取り残され、水に浸かりながら救助を待つ人もいた。近所の人たちの助けを借りて避難した高齢者も多かったが、いわゆる「近所付き合い」がほとんどなかったために、避難の情報や援助が得られず、取り残されてしまった独り暮らしの高齢者も少なくなかった。【災害列島2000：国土交通省河川局】
- 平成10年8月末豪雨災害(1998年8月)・・・福島県西郷村の養護施設「からまつ荘」で土砂災害が発生し、死者5名、負傷者1名を出す被害が発生した。同施設での防災訓練を実施していたが、その内容は火事に限定していた。消防本部とのホットラインも、火事の発生を伝えることにしか使用できないものであった。同施設は、人里離れた場所に立地しており、日頃から、西郷村とのかかわりも薄く、村の中で孤立していた。【災害弱者施設の防災対策のあり方に関する調査検討報告書：消防庁】

### [主な課題]

- 避難勧告等の情報が、住民に対して確実に伝達されていない。
- 避難しようとしても、浸水のスピードや氾濫流の速度が速い場合、避難所への移動が困難になる。また、避難所へ移動する際に被災した人もおり、状況によっては避難所への移動が危険になる場合がある。
- 豊かなコミュニティが形成されている地域では、共助による円滑な避難行動が行われることが多いが、時間的な余裕が無いなど、災害の形態によっては、地域の助け合いが十分に機能しないことがある。
- 災害時要援護者施設によっては、避難情報を確実に入手できる手段が確保されていない。また、防災訓練や防災設備が十分であるとはいえない。

災害時要援護者の避難行動においては、避難情報の取得、避難所までの移動、避難所での生活といった各段階において、災害時要援護者のもつ特性に応じたさまざまな課題が発生しています。そこで、災害時要援護者の居住位置、避難所の位置、避難ルート上の危険個所、また点字ブロックなどの避難を助ける設備などの状況を把握し、避難行動に関わる課題を明らかにして、課題を解決する必要があります。



**災害時要援護者に対する支援策の検討にあたり、地図上に災害時要援護者の分布や危険区域等を示した要援護者支援検討マップを作成します。この検討マップにより、災害時要援護者の安全かつ確実な避難支援策の検討を視覚的に補助し、避難行動における課題の抽出を行います。**